

キリトの加速世界

黒ゴマ兵長

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

気づいたら異世界へ飛ばされたキリトさ迷うなか出会ったのは銀翼の戦士シルバークロウ彼との出会いがキリトの運命を大きく変える。

クロスオーバー小説です

目次

転章：アクセルワールド

加速への序章 | 1

ブレインバースト | 4

仲間入り | 6

奪われた翼と眠れる二刀

キリトのデビュー | 10

略奪 | 12

友情・遥かなる空 | 14

心意零1 | 17

心意零2 | 19

秋葉原の決戦 | 22

消える真実 | 25

決戦・叫ぶ二刀流・序 | 27

吠える二刀流く覇く・エピローグ | 29

呪われた鎧

青い噂 | 35

共闘 | 37

呪われた鎧 | 39

炎の巫女 | 41

奇妙な物 | 44

作戦会議 | 46

四神戦 | 49

皇居の中で | 52

神器と悲しきディザスター | 54

一戦	56
旅行 in 埼玉	58
旅行 in 埼玉	60
立ち込める暗雲	62
驚愕	64
殺戮の目	66

転章：アクセルワールド 加速への序章

異世界へ飛んだ人が居ると思うか？未来へ行ってしまうというな
んとも昔のアニメでありそうなことが起こりうると思うか？・・・こ
れはそんなありえないような事に巻き込まれる体質の俺が未来へと
飛ばされてしまった俺の話

不意の出来事だった、アルヴヘイムオンラインのとある場所で歩い
ていたときだった、謎の光が突如出現したと思うと俺は一瞬にしてと
の光に飲み込まれた。

土の感覚で俺は目覚めた、視界が元通りに戻ると俺は見たことにな
い場所に突っ立っていた陰気臭いようなガンゲイルオンラインの
フィールドみたいな場所だった。

「ここは……………どこだ？」

それしか言葉が出せなかった、とりあえずシステムウインドウを開
いてみるするとウインドウは開けたもののアルヴヘイム、ガンゲイル
のウインドウではないことが分かった、

プレイヤーネームはそれこそ《キリト》と変わらないものの俺の姿
はあの世界・・・かつて健在したSAO時代の黒の剣士の姿であった。
「……………とりあえずここは仮想空間なのか？」

仮想世界ということだけでも分かると少しは安堵感が芽生えた。
そして俺は歩き出した。

少し歩いていると「HERE COMES A NEW CHA
LLENGER!!」という文字と《Kirito》VS《shell
wing》という文字が掲載されていた、そして向こう側からズシン
という音が聞こえた

シエルウイングってごちゃごちゃだなと思ったがズシンという音
が近くなってきてた、そして相手が姿を現した。

「てめーが対戦相手か？ブレインバーストってロボットしかない」と

思っていたが人型もいるんだな」

ブレインバースト？そんなゲーム売られていたか？俺は考えるが検討もつかない、試しに質問とかしといた方がいいだろう。

「あのーブレインバーストってなんでしょう？てかそもそもそんなものこの世界にありましたっけ？」

「ブレインバーストを知らない？そんなことねえーだろ騙して倒すなんて事させねーよ、見たところレベル1だし初心者だな、とっとと倒してやる」

shellwingは俺に向かって突っ込んできた、話なんてしてくれねーかと思ひ背中に手をやる

しかし俺の手は儂く空を切った、そして俺は滅多撃ちにされた。

気づいたらさつきとうって変わり草木が生い茂る緑豊かな場所に居た、さつきの対戦したときの痛みが少しあった、恐らくペインアブソーバがあるのだろう、俺は少しづつ歩き始めた。

少し行つたところに琵琶湖位大きな湖があつた、そこに向かおうとしたとき上から謎のロボットが降りてきた、

「あのーすいません」

俺は銀翼を持つロボットに話しかけた、相手はいきなり話しかけられて驚いたらしくこつちを向くと戦闘体制に入った、しかし俺に戦闘する気がないと分かるると戦闘体制を解いて

「どうかしたんですか？」

と優しく対応してくれた、俺は聞きたいことを聞くためにとりあえず質問を試みた

「あのーここはどこなんでしょう？さつきの人はブレインバーストと言っていましたか？しかもロボットばかりで」

「ふーん君はバーストリンクと言つて入つたわけでもないしニューオリンカーにインストールしてる訳でもないんだな？すごいね、うんまあ君の言う通りここは格ゲーブレインバーストの世界だよ」

これが俺と銀翼の戦士シルバークロウの出会はずのない二人が

出会ってしまった始まりの日。

ブレインバースト

ブレインバースト・・・確かにこの銀翼を持つ戦士はそう言ったし
かし俺はブレインバーストなんてゲーム聞いたこともない

「アミユスファイア対応のゲームなんですか？」

「アミユスファイア？いやこれはニューロリンカーのゲームだよニュー
ロリンカー知らないの？」

ニューロリンカー聞いたこともない名前だなてかこれ話噛み合っ
てないな一応年代聞いておくか

「これって何年発売ですか？」

「忘れちゃったの？2040年代発売でしょ」

あー2040年かはいはい・・・ん？ちよつと待ておかしくないか
俺は2026年に居るはずだぞ

「今って2026年じゃないんですか？」

「なにボケてるんだよ今は2046年だよ」

嘘だ嘘だ嘘だあー！俺は未来にタイムスリップしてしまったのか
？ならここは未来のゲームの中？

「いや俺は2026年に居たはずだアルヴ Heim オンラインって知ら
ないかてか一大事件ならソードアートオンラインって知らないか？」

どうだこれで目を覚ますか

「アルヴ Heimとかいうやつは知らないけどソードアートオンライン
なら知ってるよ20年前の大型事件でしょ？」

嘘だ俺はどうやら本当に未来に来てしまったらしいかしこう
なったらログアウトのしかたを教えてもらい情報を探すしかないあ
と本当の事伝えとくか

「銀翼の戦士さん」

「シルバークロウでいいよ」

「シルバークロウ聞いてくれ俺は過去から来た人間だ」

・・・すこしの沈黙が流れたそして

「そんなことがあり得るわけ無いだろう」

と言われたが

「俺が言ってるアミュスファイアは2024年から使われている仮想世界へのダイブ機械だ」

シルバークロウは驚いていた

「き、君は本当に過去から来たの？」

俺は黙って頷いたそして

「信じてくれるならこの世界の事とログアウトの仕方を教えてほしい」

シルバークロウは頷きこの世界の事を教えてくれた

この世界はブレインバーストという格ゲーでおおまかにレベル10を目指していくゲームらしいそしてこの世界で戦う人たちをバーストリンカーというらしいバーストリンカーはそれぞれ7つあるレギオンに所属して王のために領土拡大に挑む王は『黒の王』『赤の王』『青の王』『緑の王』『紫の王』『白の王』『黄の王』がいるシルバークロウは黒の王率いるネガネビュラスにいるらしい、そして入り片落ち方はバーストリンクとバーストアウトというらしい。

「とまあこんな感じかなあと一つきみの名前を教えてくださいませんか」

「ああ俺の名前はキリトだ色々教えてくれてありがとうシルバークロウしかし俺は現実においても知り合いがいないリアルで落ち合えないかな？」

すこし戸惑っていたがやがて顔をあげ

「分かった君とフレ登録したら君の場所へ行くよ」

「ありがとうあともしよかったら俺もネガネビュラスに入れてくれな
いかな？」

「黒の王に聞くよそれじゃあとりあえず」

「バーストアウト」

仲間入り

「バーストアウト」

バシイイイ・・・視界が一瞬暗くなり目を開けると光が差し込み視界が晴れると辺りが見えてきた、どうやらここはトイレの中らしい：しかも公園の中だった。

とりあえず個室から出て鏡を見た、この世界の俺はあの世界（2026年のリアル）と同じ顔立ちだった。

公園から出ると杉並区を探したシルバークロウに指定されたからだ・・・といってもやはり2026年の杉並区と違うしここすらどこか分からなかったのでコミュ障の俺はたじたじになりながら他人に杉並の場所へ向かった。

杉並の指定された場所で待っていると背の小さい少しポツチャリの男が近づいてきた

「君がキリトだね」

「えっじやあ君がシルバークロウ？」

少しイメージと違い気まずかったがこの少年が切り出し沈黙は終わった

「とりあえず立ち話もなんだしこのマンションに僕の家があるからそこで話さないかい？」

俺の後ろを指差していたので後ろを見た・・・とてつもなく大きいマンションでびっくりした

「あつああじやあお言葉に甘えて上がらせてもらおうかな」

そういうと俺と少年はあるきだした。

中に入ると普通の家だった、出された椅子に座り少年は向かいに座った

「とつとりあえずありがとうシルバークロウ」

「あついついやいいよあつそれとここリアルだからシルバークロウじゃなくて有田ハルユキって言ってくれあつハルでいいよ」

「そうかじやあハル俺は桐ヶ谷和人だから和人と呼んでくれ」

それぞれ自己紹介して俺たちは本題にはいった。

「とりあえずその首に着けているのは何？」

「ん？これがそのニューロリンカーという奴これがないとブレインバースト使えないよ」

「そっそうなのか？」

あとで買っておこうしかし今お金いくらあんだろう？…いちじゅうひやくえつ30万あれーおかしいな？この世界来たばかりなのにー

「そういえば和人って何年生なの？」

「ああ今は高2だがハルは？」

「えっ年上じゃっじゃあ和人さん？あつ僕は中1です」

年下なのかまあ俺も学校行かなきや行けないからそのときは中1にしとくか

「とりあえず和人でいいからあとその黒の王とネガネビユラスの人呼べるかな？」

「うん」

ハルはニューロリンカーを操作した

「分かったってけどみんな遠くにいるから30分掛かるって」

ならその間にニューロリンカー買いに行こう。

ピッピッピっとニューロリンカーの初期設定をしている時チャイムが鳴り三人の人が来た

黒の制服を来た女子とハルと同じ制服を来た男女だ

「えーと和人紹介するねこの人が黒の王事黒雪姫先輩あと二人が黛タクムと倉島チユリ」

黒雪姫さんタクム君チユリさんかって黒雪姫って本名じゃないだろ

「君、今本名じゃないだろうとか考えたろう」

うわっなんかバレてるこの人の前ではそういうこと考えないようにしようっと

「ハルユキ君から大体話は聞いている桐ヶ谷和人くんだね」

黒雪姫さんが聞いてくる

「はい、はじめまして黒雪姫さんタクムくんチユリさん」

俺は丁寧に答えた。

三人も座り少し落ち着き話は始まった、

「で、和人くん話とはなんだね?」

黒雪姫さんが真剣な眼差しになる

「実は俺は過去からこの世界に来てしまったんです」

黒雪姫、タクム、チユリはやはり最初のハルと同じ態度だった

「和人くん私を騙そうとしているのか?」

黒雪姫さんにそういわれる、なら仕方ないあの話を出すのは好まないがしょうがない

「黒雪姫さんはソードアートオンラインをクリアした人を知っていますか?」

「ああSAO大事典を見たからな確かキリトという名前だったな容姿も覚えているぞ黒のロングゴートを来て二刀の剣で戦ったという」

「俺がそのキリトです」

ポカンと口を開けていた

「何をバカなことを」

「実際に見てもらった方がいいでしょう」

そういうとハルから直結コードをもらい五人で直結したそしてあの言葉を唱えた

「二二「バーストリック」二二」

バシィィィと音がして俺はまた加速世界に来た

シルバークロウは分かったがそこにあと三人の姿があった

一人は全身黒の両手両足剣のプレイヤー次が青の鎧に右手が棒状の戦士最後が緑色のこちらにも右手に大砲みたいのを持っている名前は

『ブラックロータス』『シアンパイル』『ライムベル』だった。

「これでどうですこれでもまだ俺が嘘についてあるとでも」

三人は驚いていたがやがて

「すまない私が間違っていた許してくれ」

謝られたなんか気まずい

「いいですよ別に黒の王あなたにお願いがあります俺が帰る手段を見

つけるまでネガネビユラスにいさせてください」

頭を下げて行つた

「君みたいな奴がいると心強いよよろしく頼むこちらからも認めてくれた、これからは少しは楽になるな

「ありがとうございますいますこれからよろしくタクムくんチュリさん」

俺は振り返り二人に言つた二人は

「タクでいいよキリト」

「私はチュでいいからね！」

と返してくれた俺はこれからどんなことが起きるのかわくわくが止まらなかった。

こうして俺はネガネビユラスの仲間入りをしたのであった。

奪われた翼と眠れる二刀

キリトのデビュー

2047年4月俺が来たのは3月下旬既に数十日が経っているが実際ブレインバーストは付けていないメンテナンスに入ってしまったからだ、その間に俺はハル達の住むマンションの十階の一部屋を借りた。

そして今日から学校が始まる・・・一応編入手続きはしているハル達と同じ二年生だ(中学)ニューロリンカー経由で組は知らされている俺は『2年C組』だった俺は今教室の前で待っているセンサーに呼ばれたら入るらしいのだからしばらく待っているとドアが開きセンサーが「入れ」と言うので入ったらなんとハル、タク、チユが居たのでびっくりしたがとりあえず自己紹介をした、

「埼玉県川越市からやって来た桐ヶ谷和人ですよろしくおねがいします」

一礼し指定された席に座った、席に行くまでに「女みたいな顔ね」や「あの子かわいい」とか言われたが気にしない振りをした。

ホームルームが終わり俺はハル、タク、チユのところへ行った

「まさかみんな同じだとわな」

「ああびつくりだよカズ」

和気あいあいと話していると俺の回りに人が集まってきたので対応していったら下校時刻になっていた、帰り道俺はグローバルネットを切断し家に帰った対戦を吹っ掛けられないようにだ。

次の日ネガネビュラス五人は午後から始まる領土戦に向けてキリトにレクチャーをしていた・・・バーストリンクして分かったことがキリトは黒いコートを羽織った片手剣士らしいしかもブレインバースト史上始めての人間型アバターらしい、戦い方を学んでいたら領土戦の時間となった。

領土戦開始時刻となり杉並区を死守するネガネビュラスの所に他

のレギオンが押し掛けてきたシルバークロウと俺が前線で戦いブラックロータスとシアンパイルが後方で援護しライムベルが回復するという形態だ、ハルとタクはレベル4で必殺技以外の攻撃アビリティを持っていたが俺はレベル1なので必殺技『デッドリーシンズ』しか無いしかし剣があれば問題ない。

剣があれば問題無いそう思っていた、しかし俺は間違っていた剣のモーションを疑似で使いホリゾンタルを使ったりしてたが無意味だった当たっても削れないし攻撃を直で喰らいやられるそれが何度も続いたハル達がフォローしてくれたりして必殺技『デッドリーシンズ』を打ち勝てたが今一勝った気分がしなかった・・・こんなとき二刀流があれば・・・俺の頭に浮かんだのはかつての世界俺の黒い長刀（今も使っているが）と肩を並べた青白い長刀の事を、ハル達は初戦の癖にはすごいじゃんと言ってくれていたが俺は喜びを感じられなかった・・・

その次の週俺はいなかったがハルとチユに大きな敵が現れていた。

略奪

あの領土戦から既に3日が経っていた俺はその間にもコツを掴み次々連勝していきレベル2なった、レベルアップボーナスはスキルだったタクの『スプラッシュステインガー』みたいな攻撃技だった技の名前は『ソニックリープ』あの世界の片手剣基本スキルだった、

あの領土戦での活躍はすぐに広まり《凄腕の人間型バーストリンカー現れる!!》などの噂が建ったためえらい大騒ぎになった。

今日はタクの剣道部の試合だった、チュ、ハルは既に観戦しにいていたが俺は先生に呼ばれていたため見に行ったら決勝戦の前だった、決勝は当然タクが出ていたそしてその相手は一年の能美征二という奴だった一回目の戦いが始まるとタクは相手の裏をとりタクが先制したと思った・・・しかし能美はそれを返して一本取ったその動きはどうみても人にはできない動きだった、2本目が始まってそれは分かった能美の口を集中してみているとかすかに動いたそれはたしかにバーストと言ったはずだそこで俺は

「バーストリンク」

してマツチングリストを見たしかしこのリストに現れたのは馴染みの名前だけだった。

バーストアウトしたが加速の力がすこし残っていて能美を見たがやはり動きは人ができるようなものではなかったそしてタクは負けた。

その日の夜ハルの部屋にタク、チュと集まり能美について話し合った

「タクあいつはバーストリンカーなのか？」

俺はタクに聞いた

「ああたぶんそうだろうあれは昔僕がやっていた方法と同じだ」

「昔やっていた方法って？」

俺が聞くとタクは自分のコップにお茶を入れそれを放り投げ言葉を発した

「フィジカルバースト」

そう言うときタクの手は普通の人間ではできない早さでお茶をコップに戻した、

「フィジカルバーストこれは現実の体を三秒間加速することができる昔の僕はこれを使い剣道で勝っていたのさ僕と同じなのさ」

言葉をチユのげんこつでとぎらされた

「タクくんは違う私のために使ってたってタクくんは勝つといつも私の方見てくれたでしょでもあいつは自分のためだけに使ってた」

タクは励まされていた

「とりあえずじゃあマツチングリストに映らない方法を探つていこう」

話をし今日はおさらばにした。

次の日俺は忙しかった色々と転校した時の準備の片付けしたりなどをしてそして終わり教室に戻りハル達の所に向かったのだがハルは元気がなかったどうしたのかと聞いても何も答えてくれなかったそしてそんな風に時間は過ぎていった。

この時キリトはあることが起きていたなんて思いもしなかった。

友情・遙かなる空

バゴーン!!・・・シルバークロウが戦友アッシュローラーに吹き飛ばされた、俺はたまたまマッチングリストを見ていたらシルバークロウと言う名前が在り戦うところだったので観戦しにバーストリンクをしたそしたら吹き飛ばされるとこだった、しかしアッシュローラーはそれ以上攻撃せずなにか言葉を交わしドローで終わらせた、

俺は気になるのでそこからアッシュローラーを問い詰めてクロウの翼が無くなったことを聞いた俺はそれを聞くとすぐにバーストアウトしてハルにダイブコールをしたが応答せずに切れた。

その日からハルは当分学校にも来なくなってしまうた俺は心配だったけれどもハルは3日後普通に登校してきたがなぜかタクとは離れていたお互いが、その日の五時間目は体育だったタクは休憩していて俺とハルは走っていたふとタクの方に視線を向けるとなにかを操作してかすかに口が動いた・・・途端辺りが青くなり俺は黒の剣士キリトに姿が変わった、

タクは俺に勝負をしかけたのかと思ったが違った俺の目の前の表示に《予約観戦デュエル》と書かれていた隣にはシルバークロウも居たタクはフィールド内にいたそして対戦相手は黒い等身のアバターダスクテイカーという奴だった。

「やれやれあなたはもう少し慎重な方だと思っていたんですがね黛先輩」

その声には聞き覚えがあった剣道の大会で聞いた声・・・能美征二だった

「能美君は僕の大切な親友から大切なものを奪っただから取り替えさせてもらおう」

「なんでタクその事を知っているんだ?」

ハルが顔をこわばらせて言う

「もう聞いたんだ昨日の渋谷の戦いをごめんよ気づかなくて」

「くだらないそういう絆みたいなのには飽き飽きしますよとつとバー

ストポイントを奪って退散させてもらいます！」

そういうとダスクテイカーはシアンパイル目掛けて攻撃してきたそれを間一髪で交わすと今度はシアンパイルが猛攻を始めた

「能美もうお前の負けだおとなしくシルバークロウに翼を返せ」

「へえー何故負けなんです？」

「このステージの壁はお前には壊せない」

「へえー見かけだけで決められては困るなあーなら見せてあげますよ本当の力を」

ダスクテイカーの手が輝き紫の帯びた巨大な手が出来たそれを使い壁を破壊しシアンパイルを粉々にしようとしたところでシルバークロウが

「もうやめてくれ!!ポイントをとるなら俺からにしてくれ俺と戦ってくれ」

「いいですよー僕は黛先輩はどうですか？」

頷きバトルロワイヤルになったどうやら俺も戦いに含まれているらしいが手を出さないなぜなら機会を伺っているからだ一応剣は抜いてある

そしてシルバークロウに攻撃を仕掛けようダスクテイカーが動いた瞬間クロウの手が光ダスクテイカーの腹に当たりたおれそうだったが惜しくもはね除けられた、しかしあの光る剣はなんなんだ？必殺技じゃ無さそうだし永続的に続いている

「へえー心意システムを使うとは」

心意システム？なんだそれ？あれは新スキルなのか

「お前にバーストリンカーを名乗る資格はない」

「僕がいつバーストリンカーと名乗ったああ!!」

不意の攻撃でシルバークロウは動けず攻撃があたったと思われた思った瞬間俺はレベル3で覚えたスキル『バーチカルアーク』を打ちダスクテイカーを吹き飛ばした

「人間型すこしはやるようだな」

能美は俺にそう言う

「そりゃどうも」

軽く返しといた、

能美は翼をだし高火力の武器を出し辺りを燃やした

「やはり飛行アビリティの前では無にも等しい」

「それはどうかな着装ゲイルスラスタ―!!」

青色のブーストマシンがシルバークロウに着いた

「ここからが本番だ!!」

心意零一

強化外装《ゲイルスラスター》有田ハルユキーシルバークロウが装着したブースト装備、それを使いシルバークロウはダスクテイカーと同様空中に飛び謎のオーラとオーラをぶつけ戦っている、俺とシアンパイルは必殺技ゲージを溜めているが出る幕すらない・・・しかしダスクテイカーとシルバークロウは互いにぶつかり合い落下してきた
「ふつ有田先輩これで落ちててもあなたの方がHPは少ない負けるのは目に見えていますよ」

そんなことを言っている間に俺は走り出していたそして

「それはどうかなタク、キリト今だ!!」

ハルが叫ぶと同時に俺は壁を走り強く蹴り必殺技のモーションに入った

「ウオオオオオオデッドリーシンズ!!」

俺の撃ったスキルはダスクテイカーを直撃したそして

「ライトニングシアンスパイク!!」

タクの長い杭が腹を貫きあいつは倒れた。

とどめを刺すために剣を振ろうとした瞬間、キュイイインという音がし一つの声が聞こえた

「シトロンコール」

それはハルとタクの幼馴染みの倉嶋チユリーライムベルだった、シトロンコールはダスクテイカーにまとったえ

「なんでだよチユなんで能美を回復するんだあー!!」

ハルは叫んだがチユは見向きもしない

そして完全復活したダスクテイカーにシアンパイルはやられたそしてタイムアップとなり戦いは終わってしまった。

バーストアウトするとハルは校舎に入っていたのを俺は追いかけていった、恐らく能美を殴りにいくのだろう校舎に入るとハルはタクに説得されていた、

落ち着いていたハルは体育に戻っていき俺とタクも慌ててあとをおつた、

体育が終わり玄関から更衣室に向かうとチユに出くわした顔は青ざめていたが俺たちがこっちに來てと手招きすると俯きながらこっちに來た

「チユ！能美に何をされたんだあいつに従う必要なんてない俺のカメラの件は別にいいだから」

「違うよ私は従っているんじゃない自分の意思であいつと手を組んだのだからこれからはお互い不干渉でいきましょそれじゃあ」

チユは顔も会わせずすたすたと行ってしまった。

その日俺とタクはハルの家に行った

「なああれはなんなんだハル？」

俺はハルに聞いた

「あれはブレインバーストの極意、心意システムというんだ」

心意システムやはりあまり聞いたことのない名前だった

「なあ俺らにもできるのかその心意システムとかいうやつ」

「たぶんできると思うけどスカイレイカーさんに会えるかどうか心意システムは王とその近い人しか分らないと思う」

するとタクが

「いるじゃないか僕たちの知り合いに王は赤の王スカーレットレインが」

心意零2

「いるじゃないかもう一人赤の王スカーレットレインが」

タクはそういった、話を聞くと赤の王は数カ月前に《5代目クロム
デイズスター》を討伐する際に一緒に戦った仲間だという。

次の日学校の授業を終え俺とハルとタクはスカーレットレインの
待つケーキ屋さんに向かった、ケーキ屋の近くにつくと後ろから

「久しぶりハルユキおにーいちゃん」

というかわいげな声が聞こえた小柄な赤毛の女の子だった

「あとシアンパイルも相変わらずハカセくんだね、そちらはー」

たぶん俺の事を言っているのだろう俺は軽めの挨拶をしいた

「俺は桐ヶ谷和人だえーっと」

「あつ私は上月ユニコって言いますユニコって呼んでください」

可愛げな笑顔に一瞬ドキッとしたがこの後どんなことが起きるの
かなんて予想もしなかった。

ケーキ屋に入り席に着きニコはハルの奢りということではイチゴ
ケーキそれも特大のを頼んでいた・・・

さてそろそろ本題が出る頃かなーと思っているとハルが

「ニコ教えてほしいことがあるんだ心意システムについて」

途端ニコが固まったかと思うといきなり形相が変わり奥の部屋に
入って行ってしまった

慌てて俺たちも続くときつきまでの天使キャラとは違い鬼のよう
な顔で

「テメーはバカか？何のんきにああいう場所で心意とか言葉にしてん
だよ」

荒々しい口調で言ってきたハルはビビっていたがタクがなだめ心
意を教えるほしいというやや不本意っぽくも了承してくれた

「お前ら無制限フィールドに行くが大丈夫か？」

ハルはこつちをみたが

「問題ないついこないだレベル4になった」

そうこの間戦ったらレベル4になりスキル「ノヴァアゼンション」を覚えたばかりだった

「そうかなら行くぞいいか・・・今だ」

「二「アンリミテッドバースト」三」

視界が暗くなりもとに戻るとそこは加速世界に広がる氷雪地帯だった

ニコは赤のボディでいかにも攻撃向けじやなさそうなものだったがハルいわくなめたら死ぬということだった、

「へえーお前が最近ネガネビユラスでズウカクを現しているという人型アバターのキリトだったんだな」

ニコは俺を見てそういった

「そんじや心意についてやるぞまず心意は4つに分けられる」

そっくり2つを見せてくれた

「心意はお前らの心の中の秘めたる思いが形となって現れるいいかまず目をつぶり思いを増幅させるんだ」

言われた通り目をつぶった

俺はこの世界に来てハル達にであったあいつらは優しく俺を仲間にしてくれたそしてこんな助けてくれたなのに能美征二あいつはハル達の友情をけなしたあいつは許さない俺の剣で俺のスキルで俺の二刀流であいつを斬り刻んでやりたいあいつらを悲しませないためにも

トクンと何か押すものがあつた目を開けたらハルもタクも開けたところだった

そこから鍛練に入ったお互い離れたところで練習したそして数時間が経った時スキルを起動しながら心意を増幅しようとしていたらオーラが多くなっていることに気づいた俺はニコを呼び聞いた

「お前は攻撃増幅系心意なのかしかも覚えるのが早いな、ならお前は落ちて情報を探れ手伝ってくれる人はもう頼んどいた」

「分かった」

遠くの二人を見て俺は叫んだ
「バーストアウト」

秋葉原の決戦

ハルとタクを残し俺はバーストアウトした、目を開けると眠っているハル、タク、ニコがいた俺はニコが言っていた人が誰なのか知らないが知らないがとりあえず立ち上がった、途端後ろに人の気配を感じたそれはさっきニコがこの部屋を借りると言っていたときに話していたメイドさんだった、

「話は聞いている行くぞ」

いきなり襟首を捕まれ奥の部屋に連れ込まれた、そこにはバイクがありヘルメットを渡された

「あのーこれはどういうことですか？」

メイド服の女性に聞いたが

「話はレインから聞いたはずだ急ぐぞ、いい忘れていたが私は『ブラツクレパード』だパドと呼んでくれて構わないとりあえずはやく乗れ」
「は、はあー」

言われるままに乗った途端エンジンがかかりジェット機並のスピードで飛ばした。

秋葉原に着くと俺はパドさんに着いていきダイブカフェに着いた、簡単に申し込みを済ませたらしくすぐに部屋を借りてきたパドさんは個室に向かった部屋を見ると椅子が一つしかなかった

「あのー椅子ひとつしかありませんけど？」

「NPペアブースが借りれなかったが心配ない子供にくつつかかって大丈夫」

いや俺が無理なんですけど大体子供って言いますけどあなたほ年変わらないでしょう第一もしこれアスナに見られたら俺の立場が危ない、

「いいか合図と共にこのローカルネットにリンクしろ」

「あっはい」

「Kではカウントする0、1」

ええーカウントって3からじゃないのーと思いつつ口走った

「ダイレクトリンク」

入ると俺は黒の狼の姿になっていた隣にいたのがチーターだった、たぶんパドさんだろう。「とりあえず聞き込みする」

聞き込みで分かったことは

数日前からマツチングリストに現れないバーストリンカーが現れてこの地帯を荒らしているらしいそしてその名はダスクテイカーでは無く《ラストジグゾー》といいバーストポイントを荒稼ぎしているらしいラストジグゾーはレベル6遠隔攻撃型で選り好みして対戦相手を選んでいるらしい。

俺は許せなかったそんなやり方でバーストポイントを稼いでいると言うことが

「なら私と彼で困をやろう」

「えっなんで」

きよとんしていると戦略内容を伝えられて了解した

バトル募集をしてから数時間後ようやくラストジグゾーが掛かった

バーストリンクしていつもの剣士姿になり隣には赤いチーターブラックレパードがいた

「相手が使わない限り心意技は使うなあまり世間に知られてはいけな
いからな」

そういうと構えたので俺も剣を抜き準備した

矢印の方向を進んでいると真っ直ぐに飛んでくるものがあり反射的に飛び退いた俺のいた場所の後ろにある貯水タンクが真っ二つになっっていた

「今のがあいつの武器ホイールソー私が対処するゲージもらうわ」

そういうと俺の首元に牙をかけちゅうと音がした

「シエイプチェンジ」

キュイイインと音がするとともにレパードのフォームが変わり四足歩行になったそしてダッシュして間を詰めよりジグゾーの右肩に連続ダメージを与えたジグゾーはもがいていたが意味無く負けた、

「GJ落ちたら右肩を押さえている人物を探せあれだけの連続ダメージ

ジを与えたんだリアルでもそう簡単に痛みは消えない」

「わかりました」

落ちるとすぐさま探し見つけたのだが人混みに紛れてしまって見失った。

そして帰りは送ってくれたそして結局マッチングリストに現れない理由はわからなかったがこのことをハル達にも教えた。

消える真実

赤の王スカーレットトレインことニコに心意技の練習を頼みハル、タクと練習していち早く終えた俺は三獣士ブラッドレパードことパドさんとともに秋葉原に行きダスクテイカー・能美征二の同じ様な原理を使うラストジグゾーと対戦をしたのが数時間前の事なのだ、

俺はラストジグゾーを倒し追い詰める寸前までにいたたつたがティッシュ配りさんに阻まれ取り逃がしてしまった、そのあとパドさんに家まで送ってもらって玄関前にいるのが今の現状である・・・

玄関ロビーを通り越し切ってあったニューロリンカーのグローバルネットを接続すると時刻は七時半だった当然ハル、タクは心意の特訓を終え自宅に帰っているだろう・・・おそらくチュも、昨日噂では新宿エリアにダスクテイカーとライムベルというリンカーが現れたそうだ完璧に勝っていく二人はたちまち噂となった、もしかしたらまたどっか行ってるかもしれないがとりあえず俺はA棟の十階にある自室に向かった。

家にはいると中はヒンヤリとしていた、荷物をおろし俺は一息するとベランダに出て今日の出来事を振り返った・・・

心意技習得後俺はパドさんに引きずられ秋葉原に行きそこでラストジグゾーと戦った、ジグゾーはパドに肩を連続ダメージを喰らったためバーストアウト後の搜索は安易と思われた、実際彼は肩を回している素振りをしていて探すのは簡単だった逃げられたが・・・待てよ肩を回す？その他にも何かそういう動作をすることがあるはずだ、例えばシステムを払うみたいな動作がしかしあいつはニューロリンカーをつけていなかったそんなことはありえな・・・いやニューロリンカーはここ数年で作られたはずだということは昔の世代機を使っているかもしれない、

俺はデスクを操作しフルダイブの技術を見た

第一は俺の時代のマシンナーヴギアとアミュスファイア第二は●●

第三は・・・脳に埋め込むブレインインタラプトチップ今では違法になつているのかしかしこれを使えばグローバルリンクしなくても済むということか!!

急いで俺はハル、タクを呼んだ。

急いで集まってもらい俺は早急に見つけ出した推測を話した

「うーん確かにその方法を使えばできるかもしれないな」

「だろう」

「しかしそれだと違法チップが出回っていることになるよ」

タクが言うがハルが返答をした

「いや前にタクの親にバックドアプログラムを流した奴等が関わっているかもしれない」

以前あつた出来事らしい

「なっハルも言ってることだし俺はこれに賭けたい明日能美にこれを言ういいか？」

俺は真剣に説いた

「分かったカズのことだしなんとかなるかもな」

二人は承諾してくれた

「明日が最終決戦だチュを助けるぞ」

そっくり次の日を迎えるまで眠りについたのであつた・・・

決戦・叫ぶ二刀流・序・

〜次の日〜

俺はニューロリンカーを切り自宅を出て梅郷中へと向かった、教室には部活の朝練があるタクが来ていた、チユも来ていたが最近話すことさえもしていないそしてハルも遅刻寸前で来た。

一時間目は体育で剣術大会だった、戦い方は自由と言われたので俺は長年愛用した戦い方を使った男子や女子は「なにあれ？」などと言っていたが戦いが始まると俺の圧倒的に黙ってしまった、戦い方はソードスキルモーシオンを使いスキルで勝ったようなもんだった、先生に「お前それは何流なんだ？」と聞かれたから普通に「アインクラッド流」と答えた

二時間目、三時間目、四時間目が終わり昼食を済ませ俺とハル、タクは学校の裏へ移動した、理由は昨日の推測をあいつに話すためだ。目的の人物は既に居た、こちらに気づくと不適な笑みを出しながら会釈してきた

「いったいこんな時間になんの御用ですか？桐ヶ谷先輩」

図々しさがある分余計に腹が立つが落ち着いた声音で

「お前がマツチングリストに現れない方法が分かった、お前は過去の違法チップブレインインタラプトチップを使っているそのためニューロリンカーを接続しなくていい」

一瞬驚愕の顔をしていた能美だがすぐに平常に戻り

「へえーこそそこそと嗅ぎ回りましたかそれでどうしますか？通報しますかそれともおかねでも要求しますか？」

「いやブレインバーストで決着をつけようどっちかが負けたらポイントを全損までする、どうだ？」

「いいですよしかしいちいち攻撃するのも面倒なんで一回で決着を決めましょう中立フィールドでサドンデスデュエルというのがありませんどうですか？」

「いいだろうなら対戦は今日夜だいいな」

コクリとうなずき能美は学校にもどった。

くハルの家のリビングく

ハルと一緒にタクを待つこと数分ようやく現れたタクは後ろに連れがいた

「チュウ!!何でここに」

ハルが飛び上がった、するとチュウは口を開いた

「私、能美にハル達のところへ行き裏切れ言われたのももうそんなこと耐えられないだから私もこっちの味方として連れてって」

「いいよ」

俺はあっさりと答えた、そして一時間場所の変更を繰り返してついにinする時になったそして

「二二アンリミテッドバースト!」と唱えた。

無制限中立フィールド内梅郷中で予想外のことが起きたそれはダスクテイカーがここにいたということだあれだせ変更をしたというのにそしてもう一人人影があつた彼は

《加速研究会》のブラックバイスと言うやつだったあいつはこの世界でゆういつの減速能力者であった、そいつに俺とハルは動きを封じられたそしてシアンパイルとダスクテイカーの一騎討ちが始まるところだ

「さあ行きますよ黛先輩」

「ああこっちも最初から本気だ!!シアンブレード」

パイルドライバーが変化し剣となった、そして二人は駆け始めた・・・

そのとき俺の背中が熱くなり何かがうずくのを感じた。

吠える二刀流く覇く・エピローグ

シアンパイルとダスクテイカーの心意技が火花を散らしぶつかり合っている、俺とシルバークロウは謎の人物ブラックバイスの攻撃により身動きがとれていない為助けられないしかしシアンパイルは助けなど必要のないという感じでダスクテイカーに詰め寄っている「どうだ能美これが僕のカだ!!」

「確かにスゴいですけれど先輩にはある弱点がある」

素晴らしい紫色の剣をシアンパイルの喉元へ向けた、するとシアンパイルはそれを避けようとしたしかしのどもとへのねらいは罠で右脇を撃たれた、

そして間を詰められ

「デモニックコマンドェア!!」

シアンパイルに光が発せられた、しかし何も起きずダスクテイカーはシアンパイルに吹き飛ばされた

「欲張りすぎるんだよ君は、僕は不思議だった何故チーちゃんの回復アビリティを盗らなかつたのかかそれはとれるのもストックとかがあるということだろうそして僕のアバターはパイルドライバーで占められているだから無理なんだよ」

「フッフ確かにそうかもしれないですね、ですが僕は負けない」

そういうとダスクテイカーはライムベルを捕まえて右腕を折った

「アアッ」

小さな悲鳴が聞こえた、チユの声だ

その途端俺の何かが切れた

俺はプレスから逃れて剣を握ったそして凄まじいオーラを放つ心意技《雷獄瞑刃(エレリルストリーム)》を繰り出した、ダスクテイカーの右腹に当たり吹っ飛ばすことはできたが意識が戻ると途端、体がだるくなり倒れてしまった目の前ではダスクテイカーが立ち上がるとこだった

「たった一撃で倒れるとは凄まじい威力ですね僕も危なかったですよ

でもあなたはもうおしまいださようなら桐ヶ谷先輩」

紫色の剣が俺を突き抜く寸前パキツという音がして紫の剣は折られたそして折ったビームのうち先を見るとエネミーに乗った黒いアバターが居た

「嘘だ」

能美から驚愕の声が発せられた

「貴様かマッチングリストに現れないバーストリンカーとは」

それが乱入者の第一声だった、そして乱入者こそ黒のレギオンネガネビュラスの王ブラックロータスだった

「何故ここに黒の王が今は沖繩にいるはずだ！」

「ここは無制限フィールドだ沖繩からダイブしてここに来ることも可能だ」

そして地面に降り立つとブラックバイス目掛け先ほどのビームを発射したそれを避けたことによりシルバークロウの妨害が解かれた

「君もいつまで捕まっているつもりだクロウ、キリトは早々の解いたではないかそして君もいつまで寝ている早く立てそしてあいつを倒すのではないか？」

そうだ俺は立たなくてはならないあいつは俺の仲間を痛め付けたそれだけは許さない

「ウオツ・・・ウオオオオオオオ!!」

何とか立てたそしてクロウの横に行き

「行けるな？」

「ああ・・・着装ゲイルスラスタール!!」

シルバークロウがスカイレイカーという人の外装を装着した、その時俺の背中が熱くなった何かが出てきそうな感覚だったそれはあの世界での大切な愛剣の残像・・・いや実体化したものだっただ。

カチャリ二つの鞘が当たる音がしたそして俺はその二つの剣を抜いたそして青白の剣に

「おかえり」と囁いた

「何故何故だありえない二刀流なんて聞いたことが無い！」

ダスクテイカーが叫んだ

「なら俺が最初ってことになるな」

二刀流を振って答えた、シルバークロウが

「もう終わりだここで終わらせる」

ブーストした飛力でシルバークロウが飛び俺はウォールランで限界まで駆けて飛んだ、

ダスクテイカーも羽を広げて飛んだ

「そんなことはさせないぼくがぼくが加速世界で一番なんだああ!!」

紫の剣を突き上げるダスクテイカーにシルバークロウは《レーザースード》俺は新心意技あこのころの愛用スキル《スターバーストストリーム》を繰り出した、カアアンとぶつかり合う衝撃音と衝撃波に耐えてダスクテイカーにダメージを与えて倒れたと思われたしかしリイイインという音がして

「・・・シトロンコール」

緑色のオーラがダスクテイカーを包んだ、チュがまたしても裏切ったのだ

「フファハハハハ！やはりこの力があれば無敵だ先輩達はもう終わりだ・・・何故だ何故翼が出ない！」

すると翼が割れるとともにシルバークロウの背中が光ったそしてあの懐かしき翼が戻った

そして光速の剣がダスクテイカーを切り裂いた。

地に降りてくるとダスクテイカーは

「何故翼が消えるんだ」

と吠えていた、するとライムベルが

「それはあたしの力が《回復アビリティ》じゃなくて《時間を巻き戻す》なのなぜならあたしはバーストリンカーになったときから不思議に思っていたのなんであたしは回復アビリティなんだのかとそしてあなたをはじめてヒールしてそのあとハル達と話して分かったのハルは強化外装まで直したと言っていたのいくらなんでもおかしすぎると思ったわそして修理系アビリティだと思った」

ダスクテイカーは驚いていたが正気になると

「裏切るのかあんなに勝たせた、ポイントをあげたこの僕を！」

「最初から仲間になったつもりはないわ最初はあのビデオで脅されたからよ」

「終わりだ」俺が呟いた

「いやだあ僕はまだ失いたくない死にたくないやだあいやだあー」

言い終わる前にレーザーソードがダスクテイカーを貫いた。

ようやく長い戦いが終わった

「よくやったぞみんな特に倉島君のメールがなかったら駆けつけられなかったからな」

「チユが!？」

「そーよ大変だったんだからねあなた達にはばれないようにメールするの」

ライムベルが堂々という

「ありがとうチユ」

「はあーやつばあなた達だけじゃ心配だからあたしもネガネビユラスに入るわ」

パパッと加入登録を済ませてしまった

「それはそうとキリト君、君の二刀流は凄かったなあれはアビリティなんだろう?」

「はい」

「これはすごいことになるな噂が広がるぞ、しかし疲れたな帰るとするか現実へ」

こうして俺たち五人は現実へ帰還した。

くエピローグく

黒雪姫先輩も帰ってくる日の前日領土戦を一戦落とすもほぼ勝ったことにより杉並は相変わらず黒の旗が建っている、そして黒雪姫先輩も帰ってきて学校も平和になってきたダスクテイカーはあれから

加速世界には現れていないあれから学校でも・・・

階段を登っていると見覚えのあるやつが通りすがった

「あの」

「なんででしょうか先輩？」

能美征二だかつての上から目線顔ではなくすつかりおとなしい顔となつてしまっていた

「俺2年桐ヶ谷だけだ」

「ああ一緒にネットゲームで遊んでいたえーとタイトルは・・・覚えてないや」

このとき俺は思ったかつて黒雪姫先輩がいていた加速世界を忘れるというのが今まさに能美に起きているのだ、

「それではこれで」

能美はスタスタと行つてしまった

正直ビビったしかしそれをひきづきまわすこともできない俺はさらなる事へと足を進めなければ行けない

そう思い歩き始めたのであった。

そして二刀流アビリティはすぐさま加速世界に知れ渡った、

そしてスカイレイカーこと倉崎フーコもまたネガネビユラスへと戻ってきたのであった

「へえーキリトもこの世界でも見せてるわね私もこの世界に慣れて有名になれるといいな」

青髪の少女が狙撃銃を持ってあたりを見回し歩き始めた・・・彼女
の名前は《Shinon》

呪われた鎧 青い噂

この世界は俺の居た世界ではない、すべてが進化している世界：：
いわば未来だ。

この世界ではどこでも仮想世界にダイブできるようになっていて、
ニューロリンカーそれがこの世界の機械だ俺の世界の頭に被ると違
い首につければいいだけの優れものだった、そしてこのニューロリン
カーには子供しか知らないそして知る人数も数千人以上かない謎の
世界がある・・・《ブレインバースト》というゲームだ。

ブレインバーストはただの格闘ゲームだと最初は思う、しかし実際
は脳の思考速度を加速して戦いポイントを稼ぐというところでもない
ゲームだったしかも負けて全損になるとゲームがなくなるという仕
組みだプレイヤーは日夜対戦を挑み挑まれ勝っては敗けを繰り返す
そうして最終目標はレベル10になることだ・・・

2047年も三分の一を過ぎ桐ヶ谷和人の生活も一安心できると
思っていた・・・しかしそれは現実世界だけであった、もう一つの世
界ブレインバーストに入ると瞬く間に人だけができる、理由はつい
先日ダスクテイカーという敵との戦いの時に誰も手に入れていない
新アビリティ《二刀流》を手にいれたからだそれを嗅ぎ付けたレギオ
ン達が毎日のように黒のレギオン領土杉並区にくるからだ(ブレイン
バースト内)そしてもう一つまだ誰もなっていない人型アバターだか
らだ、そしてあつという間に有名人となってしまう。

今日も領土戦をネガビュの仲間達と勝ち毎度のハルの家に集まり
祝勝会をしていた、ネガネビュラスは現段階六人の構成だ王のブラッ
クロータスⅡ黒雪姫・シルバークロウⅡ有田ハルユキ・シアンパイル
Ⅱ黛タクム・ライムベルⅡ倉島チヨリそして第一期ネガネビュラスか
ら新星ネガネビュラスに復帰したスカイレイカーⅡ倉崎フーコと俺
の六人だ、

乾杯も一段落して落ち着いた頃に黒雪姫がある噂を教えてくれた
「そういえば最近通常フィールドにあるバーストリンカーが現れたんだってな」

通常だけって事はまだ新米ランカーかなと思った

「何でもそいつも人型アバターらしい」

俺はびっくりした俺以外にもそんなやつが現れたんだなと

「そいつの特徴は青髪の女アバター武器はライフルそのライフルで一撃で倒しているらしい」

青髪の狙撃手かあ思い浮かぶなああいつのことが

「そうなんですかそいつの名前は何て言うんですか？」

俺は聞いた

「ん？ああ確か《氷の狙撃手（アイススナイパー）》《Shinon》って言ってたな」

俺の頭に衝撃が走った、なんでシノンがこの世界にいるのかとあるいは偽物なのかと

「先輩そいつはどこで現れるんですか!？」

立ち上がり説いた

「えーと確か新宿辺りと聞いたぞ知り合いか？」

答えを聞いた瞬間俺は走り始めていた、そしてバスに乗り新宿に着くや否やマッチングリストを探したするとShinonという名前があつたから対戦を挑んだ。

光が戻るとそこには人型のアバターをした青髪の、かつてガンゲイルオンラインで共に戦いアルヴヘイムオンラインでも一緒の少女：シノンが居た

「シノンなのか？」

俺はかすれた声で聞いたすると相手は薄く微笑み答えてくれた

「ええそうよキリト久しぶりね」

これがシノンとの再会だった。

共闘

「久しぶりねキリト」

それがこの世界、そして久しぶりに聞くシノンの第一声だった。

「どうしてお前がここに？」

俺は落ち着きを取り戻し、向かい側に立つ青髪の少女に聞いた

「私だって知らないわよ、あの日キリトを見かけて追いかけたら変な光にはいるところを見て覗いたら吸い込まれたのよ」

どうやら俺が見つけた光の事らしい、

「この世界の事は分かるか？」

「ええここは未来でブレインバーストというゲーム内でしょ落方は対戦相手を問い詰め聞いたわ」

得意気な顔で自慢してきた。

「なあシノンはどうかギルドに入ってるのか？」

一応、レベル4まで来たのならそれなりのギルドには入っているはず

「いいえ、ソロでやっていっているわ」

「なら俺が入っているギルド、ネガネビユラスに入らないか？」

少し驚いた顔をしたけどシノンは

「いや遠慮しとくわ、私にはやらなきゃいけないことがあるの・・・私はこの世界に来たとき一つのライフルを持っていたわ名前は《エイゼルシユーター》けどこの武器は使い物にならないのだから私とはあるダンジョンにある強化外装《マイルストロームヘカート》というのをゲットしなきゃならないの」

「へえーだったら俺も手伝うよしたらギルドにも入れるだろうし、でどこ？」

い 無制限中立フィールドの南にある洞窟にその強化外装はあるらしい

ふっつていきバーストポイントも多く手に入った。

そしてお目当ての強化外装《メイルストロームヘカート》を手にいれて無事帰還した

翌翌日、領土戦がありシノンはこっそりと味方してその働きぶりに感謝されてシノンはネガネビユラスに加入した、リアルでも久しぶりに会いネガネビユラスのメンバーともすぐに打ち解けていた。

そして次第にネガネビユラスは最強の人型一人を使うレギオンとして恐れられていった。

そんな最中、朝田しのは転校してきて梅郷中学も文化祭の準備をし始める頃、シルバークロウ、有田ハルユキが宇宙レース大会の切符を手に入れた、そして俺もまた新たな強化アビリティ《アームブラスト》を習得していた、そして明日宇宙レース大会が始まる。

――

一方そんなころ

黒雪姫は生徒会長から大量の書類を渡され萎れていた。

タクムは文化祭できる衣装を渡され沈んでいった。

――

という負のオーラが

漂っていたとか。

「最悪だあー」

呪われた鎧

ネガネビユラスに最大の危機が訪れようとしていた、ブラックロータス、スカイレイカーシルバークロウと俺はこれから7のレギオンマスターが集まる7王会議に行つたのだ。

理由はこの間行われたヘルメスコート大会で加速研究会のラストジグゾーの乱入の際にシルバークロウがこの世界で恐れられた怪物クロムディザスターを召喚したからだ

クロムディザスターとは後々聞いた話によるとブレインバーストが出た初期辺りに残酷な倒しかたをしたやつがいてそれを討伐したときにそいつの呪いが残り今もどこかにあると言われていたらしい
そのクロムディザスターがシルバークロウに寄生していて今の事態なっている

そしてシルバークロウに与えられた試練は鎧を浄化することだった。

俺は7王会議が終わつた後も浄化のしかたを考えていたしかし
いっこうに浮かばなかった

「ケ谷くん 桐ヶ谷くん!!」

そのとき突然名前を呼ばれた

「はっはいー!」

とっさに立ち上がり意識をもどした、そこは家ではなく学校だった
「桐ヶ谷くんやってくれるのか?」

いきなりそんなこと言われてなにやるのかも知らずに
「やります」

と言ってしまった、それが間違いだった

「そうかでは桐ヶ谷、飼育委員会よろしくな」

そうそれは俺の苦手な飼育委員会だった。

「はあー」

昼休み俺はため息しかついてなかった

「そんなにしよげてたって聞いていない自分が悪いんでしょ」

そう言ってくれるのは俺のとなりにいる朝田詩乃だ、詩乃は俺と同じくこの世界に飛ばされだ俺の仲間だこの間会ってネガネビユラスに入った、学校は決めていなかったらしく

梅郷中に来ればと言ったら本当に来たそしてクラスは奇跡と聞いていいだろう俺達と同じ

そして家も俺らのマンションの近くにすむことになった

「だって浄化のこと考えていて話聞いていなかったしよ」

「だからといってすぐにやりますなんて言わなければいいのに、しかしハルちゃんの事はどうするのいまだに手段をつかめていないんですよ。」

「ああ正直なけどハルもそれなりには考えているらしいしこっち対策をねるだけだろう」

そういつて俺は立ち上がり

「飼育委員行ってくるわ」

と言い歩いていった。

飼育委員の二人はメンド臭がつて少しやると「用事があるからー」といつて帰っていつてしまった

そして数時間やっているとさすがにきれいにはなってきたがまだまだ駄目であったそんなとき

「遅れましたすいません」

という声があったようにも思えたしかし声ではなくチャットのログだった、ログを出したと思われる方を向くと小学生くらいの女の子がいた

「初めまして私四埜宮謡と言います」

炎の巫女

「君は・・・？」

いきなり俺の目の前に現れた少女、四埜宮謡と名乗ってきた

《すいません私はこの学校に飼育委員を設立してほしいと頼んだ者です》

「君が飼育委員を？」

《はい元々私たちの学校で飼っていたのですが急に殺すことになってしまい反対したら飼いてが見つかったらいいと言われたのでここにお願いしたのです、

「なるほど、それより四埜宮さんは声がでないのか？」

先程からチャットしか打っていないので聞いた

《はい、私は小さい頃から運動性の失語症というのになっており肉声での発音ができません》

そういうと口を動かすが声は聞こえない

「すまんなんか嫌なこと聞いちやっとな」

《いやいいですよ、これから一緒にやっていたただく人にはわかってもらっていた方が楽ですし》

「そうなのか？」

《はい、それでは飼育小屋の掃除をしましょう》

こうして飼育小屋の清掃は再開された。

数時間後、掃除は完了して四埜宮さんが報告を生徒会にするために俺は案内をした

「すいません誰かいますか？」

「入ってくれ」

一言返されたのでドアを開けると黒い制服を着た黒雪姫先輩が居た

「おや桐ヶ谷くん君も一緒だったのか、ういういどうだ飼育委員は？」

《ええ桐ヶ谷さんが手伝ってくれたお陰ですぐに終わりました》

ん？今黒雪姫先輩、四埜宮さんの事ういいういと言ったよね？

「おや、桐ヶ谷くんそんな顔をしているということは聞いていないんだな、ういいういは

第一期ネガネビュラスのメンバーだぞ」

「まじですか?」

《ええ本当ですよ黒の剣士さん(・・・)》

最後顔文字までつけられているし俺の加速世界でのあだ名さえしっているということは間違えないこの四埜宮謡という女の子は紛れもないバーストリンカーだ。

「はあああ」

《そんなに落ち込まないでください、私が教えていなかったということもありますし》

「そうなんだけどなあなんか意外で四埜宮さんはまだ小四だし」

《そうですか・・・なら私の実力知りますか?》

「え?・・・いやそういうことじゃなくて別にそういう意味じゃ」

《違いますよ私とあなたでコンビをくんで戦うということですよ》

軽く笑いながらそう言われてホッとした、本気で戦っていたらたぶん負けていただろうし

「そういうことかそれならやります」

《では行きますよせーの!》

「《バーストリンク》」

一瞬の暗転の内視界が戻ると目の前には巫女のアバターがいた

「それがキリトさんのアバターなんですねリアルとあまり違いありませんね」

「君は四埜宮さんだよな?名前オーダーメイドンでいいのかな?」

「はい」

「えーと相手はブッシュウータンとオリーブクラブかグレウオの奴等か」

歩きながら話していると相手も歩いていたのですぐに見つかった、しかしいつもと様子がちがった、そして

「着装ISモード」

と叫んで黒い眼球が胴体に現れた。

奇妙な物

着装ISモード・・・確かにブッシュウータンはそう言った、途端その胴体に黒い眼球が現れた。

「なっなんなんだ？その黒い眼球？」

「お前たちには関係無いツスどうせアンタら負けるんだから」

ブッシュウータンはそう言うと言おうと手から暗黒色のオーラを出してきた

「ダークショット!!」

手から繰り出された暗黒色のオーラは俺目掛けて一直線に飛んできた

「ツツツチ」

辛うじて避けたがこれは遠隔攻撃などでは飛ばせる攻撃では無いと思っただけしかしこれを可能とする攻撃が一つあったそれは・・・

「心意攻撃!?!」

ISモードのISはインカーネイトシステムの略ということだったのか？

「へえーこれのこと知ってんスね」

「それをどこで誰からもらったんだ？」

「教える必要性なんて無いでヤンス」

襲いかかってきたブッシュウータンに一つの矢が飛んでいった、それは今まで沈黙していたパートナーのアーダーメイデンが矢を抜き放ったのだ、

「キリトさんこの二人はなにか得たいの知れないものに取り付かれていますよ私の力で浄化したいと思います!!」

「分かった」

少し時間を稼ぐことだと思おう攻撃を受け流して受けて時間を稼いだ、すると

《少し涼しき三熱の》

突然、世界が燃えた火が辺りに燃え盛りそしてブッシュウータン、オリーブクラブを

包み込んだ

《苦しみを免るそののみか》

そして火の粉が二人に辺りHPが全て無くなった。

次の日

俺は謡さんに呼ばれて飼育委員室に入っていった、

《和人さんこんにちは今日はちゃんと動物を連れてきました(・o・)》

《

「そうなのか？」

《はい、私たちが飼っていくのはアフリカオオコノハズクのホウとい
います肉食系なので気をつけてくださいね》

「えっに、肉食!？」

《はい、まあ今日はそれだけでもう一つは災禍の鎧とISSキッドの
件についてです》

「あっああそういうことだな・・・んちよつと待って今黒雪姫先輩から
メールが」

ピロツと音がしたと思うとニューローリンカーにメールアイコン
が出てきた

「えーと今からハルの家で話し合いをするから俺と謡さんも来るよう
にだ」と

《そうなんですか、それってフリーねえも来ますよね?》

「フリーねえ? あっフウコさんのことか、うん来るよ」

《やっぱり、ですがサツちんの呼び掛けなら私も腹をくくります通ら
なければならぬですもんね・・・よし行きましよう》

謡さんはなんでそんなにフウコさんに怯えているんだろう、確かに
あの人は怖いと思うけどそれは俺たちにだけじゃないのかなあ?

ハルの家につくとそれはすぐに分かった。

作戦会議

「きゃーういうい！私たちと会わないうちにこんなに大きくなっちゃって（＾―＾）」

・・・驚愕この一言に尽きる

俺と四埜宮さんはハルの家に向かった、そして無事についてハルの家にはいったそして今の現状がこれだ、

「驚いただろう、ういういは二年前の戦いするときまではフーコ専用のオプションだったんだ、敵地へ上空から突っ込んでいったな」

《サツちゃんそんなこと言ってないide助けてください!!》

珍しく四埜宮さんがミスタイピングをしていた、よほど苦しいのだろう

「フーコそのくらいにしといてやれういういが苦しそうだ」

「分かりましたわこの作戦が終わるまで我慢しています、あと鴉さんさつきから目が変態目線になっていますよ、罰として軽くおしおきを用意しますね」

ニコリと笑っているが実際は笑っていないだろうあれは必殺技みたいと言うと《真空波

レイカースマイル》名付けよう、ちなみにいうとハル曰く黒雪姫先輩にもあるんだそうだ

とりあえずいまこの場にはネガネビユラスの8人が揃っている

この家の主ハル、ネガビユのリーダー黒雪姫先輩、四元素の風使い倉崎フーコ、同じく

四元素の炎の使い四埜宮謡、ハルの幼馴染みタクとチュ、俺と俺とタイムスリップした

シノンこの八人だ。

「今日集まったのはシルバークロウに取りついた災禍の鎧の浄化と無制限フィールドに

取り残されたういういのアバターを取り返すことを話し合う」

「ちよつと待ってください、四埜宮さんのアバターはちゃんとでてい

ましたなのに取り残されたってどういうことですか？」

「いい質問だ確かに。うーいういのアバターは通常フィールドではな出現はする、しかしブレインバーストは設定が複雑で通常フィールドと無制限フィールドはかけ離れた存在なんだ。そしてうーいういのアバター無限EK状態に陥っているのさ」

「無限EK状態？」

「無限EK、通称無限エネミーキル。これは少々複雑で無制限フィールドでは死んだらその一時間後に蘇生する。だろ。しかしそこにはエネミーがいて延々と殺されるのだ。これをエネミーキルと言う」

「どうしてそんなことになってしまったんですか？」

「それは二年前のことか・・・私は赤の王に襲いかかったことは知っているな？。そこから

話は始まるのだ・・・」

二年前私は赤の王を討った。そして他の王を討つために私は死に物狂いで斬りかかった、しかし結果誰も倒せず気づいたらタイムアップになっていた、私はきつと狙われると思い

ネガビュのみんなを集めて解散しようと言った、しかし仲間達はそれに反対した私は

それに負けて解散を諦めた。そして四神のいる砦を目指した、理由はレベル10に到達するためだった、そして私たちはそれぞれの門めがけて駆けていった、結果はうーいうい、アクアカレント、グラフィアードエッジを無限EKにしてしまい私とフーコは逃げたがフーコは

隠蔽生活、私はローカルネットの接続をやめることになってしまった。

「・・・私のミスのせいで結果的にネガビュは崩壊してしまった、しかし今またこうして仲間が増えてフーコとうーいういも戻ってきた。私たちはやはり再開する。ときが来たのだ。ろう。そのためにもううーいういの救出をなんとしてでも成功させる」

「分かりました、ですがどうやって浄化を？」

「ういういの浄化の力を使うのさ」

「なるほど」

「よし決行日は今週の日曜だ、絶対成功するぞ」

「おう!!」

こうしてネガビユの作戦は指導するのであった。

四神戦

その週の日曜、約束通り作戦をするため有田家にネガネビユラスのメンバーが集まった

今回の作戦はまず四神の一匹のスザクの砦で無限EK状態になっている四埜宮さんのアバター

アードーメイデンの救出とシルバークロウに取りついたクロム
デイズスターの浄化だ

「では最初に作戦の配置についてだ、今回の相手はスザクとてつもないエネミーだそれ故

生半可な攻撃では通用しないだろうだから私と和人くんは前衛で近接攻撃、朝田さん、ハルユキくんは援護攻撃、チユリ君は回復、タクム君はころあいを見計らいフーコに落としてもらってくれそしてうういひは私たちがダイブしてから十分後に来てくれ」

《分かったのです》

それから直結ケーブルを何本も用意してログインする前までになった

「そういえばハルユキ君パソコンはあるかなあるならもって来てほしいんだが」

「ありますけど何かに使うのですか？」

「ああ今回の作戦は極めて難しい誰かが無限EKになるかもしれない、だからパソコンで親機を作ってもしも万が一のことがあったら電源を切れば全員ログアウトできるんだ」

素晴らしいカチャカチャと作業を進める黒雪姫先輩だった。

「それではそろそろ行くぞカウント五、四、三、二、一！」

「アンリミテッドバースト!!」

バシユウウウという音がして視界が暗転次に目を覚ましたら全員アバターに変わっていた

有田家を後にした一行は皇居そびえ立つ千代田区を目指して歩き

出した

千代田区に着くと今度は四神スザクの砦に向かった

《私の眠りを妨げるやつわは誰じゃ？ワシは眠りを妨げられるのが嫌いじゃ殺してくれるわ》

キシヤアアアアという咆哮と共に四神スザクが現れた

俺とロータス先輩は一旦間を取りシノンの銃スキル《ブレイブガトリング》とクロウの心意技

《レーザーランス》が飛んだ

見事に命中したが全然体力は減っていないかった

「怯むな行くぞ」

ロータス先輩の掛け声と共に二つの剣を抜き出しスキルモーシヨンを意識したそして二刀流

《インフェルノレイド》を繰り出したそれはお腹辺りに当たりスザクが吠えた

しかし隙を与えず二刀流心意技《ジ・レジエンドノヴァ》を繰り出したロータス先輩もそれに合わせ《ヴォーパルストライク》を繰り出した、

その後も戦いはヒートアップしていったがさすがに俺らに勝利が見えてきてあと少しのところにオーダーメイデンもやって来た

「メイデンもう少しだー！」

みんなが思い思いに叫ぶ・・・しかし現実には優しくなかった門のドアが閉まり出したのだあの距離ではシルバークロウの飛行力でも追いつかない、諦めかけたそのときだった

俺の中で何かが動いた、頭の中で声が聞こえたそれに呼応するように俺は唱えた

「アバターチェンジ!!フォームALLO!!」

煌めく光にのみこまれた俺は背中生えたものが何かと察したそれは妖精の羽だった

そう俺はALLOのスプリガンキリトへと変わったのだ、その羽をはためかせて俺はオーダーメイデンのところへと飛んだ、感一発助けた

のだが勢い余ってどこかへ突っ込み気を失ってしまった。

皇居の中で

「アバターチェンジフォームALLO!!」

囁かれた声の通り叫ぶと俺の姿少し異なり羽の生えた剣士となった、そして俺は閉まりそうな扉めがけて一直線に飛びアーダーメイドンを助けたところで意識が飛んだ。

「キーさん、起きて下さい!!」

誰かに呼ばれ体を揺すられてることで意識がようやく戻ってきた「ここはどこだ?」

気がついてを当たりを見回すといかにも日本庭園らしき所に俺とメイドンさんは座っていた

「恐らくここは皇居の中だと思います、キーさんが私めがけて突っ込んできたときそのままの威力で後ろに突っ込んでいってしまったので」

「皇居の中か・・・」

にわかには信じられないことだ、なぜなら黒雪姫先輩も言っていたからだ「皇居は絶対に入れない不可侵域なのだ」と

しかしここが皇居の中だということを信じられなくもない、この中に入って調べればいいのだから

「よし探しにいこうぜ出口を」

「やはりそういうふうだと思います覚悟も承知です、ローねえ達がケーブルをぬくまえに調べられることは調べましょうか」

そういつて歩き出した。

皇居のなかは想像以上に厳しかった、警備ロボは多いし仕掛けも結構危なかったしかし俺の

感をフル活用してなんとか奥の方まで着いた

「なんとか最奥部付近まで着いたな」

「ええこれからどうされますか?」

「そうだな．．．ん？何かあそこに光るところがあるぞ」

俺の指す方にはキラキラと光るところがあった、俺は急いでその方に近づいたしかしそれは出口では無かった見たことのない物が1つ置いてあった

「これは？」

「これはたぶん七つの神器（セブンアークス）だと思います」

「セブンアークス？」

「ええ簡単にいうとこの世界の最強の武器です、青と王の剣・緑の王の盾・紫の王の杖などが分かりやすいと思います」

これまで会ってきた王の武器の中には最強の武器があったということになる、そしてその他にもあと四つもあるということになる

「他の四つの在処は？」

「私も分かりませんがダンジョンの奥深くとかにあるらしいのです」

そのとき俺たちしかいないはずのこのフロアに声が響いた

「拙者が1つの神器を持っているでござる」

「誰だ！」

俺は声が出したと思う方に顔を向けたするとそこに青色の影が現れた

「驚かせてしまいましたか、私はトリリードテトラオキサイドと申します、この神器の1つをどうしてもほしくて取ってしまいました者です」

そこには謎の剣士トリリードテトラオキサイドというやつが立っていた。

神器と悲しきデイザスター

トリリード・テトラオキサイド,,,, 謎の若侍アバターの名前だった、外見は青の王の側近の姉妹コバルトブレードとマンガンブレードに似ている、そんな彼は俺らが来る前から皇居内に居るようにしか見えなかった

「7神器の1つを持っているって言ったな」

「ええ拙者はここに来たときにその台座に置いてあったジ・インフイニティがどうしても欲しくなってしまうつい手を出してしまいました、それがこれです」

トリリードは背中にある鞘から剣を取り出した、とても長く美しい長剣だった、正直片手剣を使う俺は欲しくてたまらない衝動が起きたがなんとかそれを抑えた

「けどこの台座には他に二つの物があった形跡があるが？」

俺は目の前の台座に目をやるがジ・インフイニティが置いてあった台座の他に二つの台座が並んであった

「いえそれについては拙者も知りませんここに来たときは既にありませんでしたから」

「恐らくここにあったのが元はザ・デイスティニーだった今はデイザスターが置かれていたんでしょう」

そう口を開いたのは今まで沈黙を貫いていたアーダーメイデンだった

「どういうことだ?,,,,,っ!」

突然不意な痛みにも襲われた、そして意識がなくなっていた。

「フラッシュユブリンク!!」

暗闇の中から声が聞こえた、聞いたことの無い声だった

「よし!! ついに中に入れた」

暗闇が薄れていき1つのアバターが見えた、シルバークロウと同じか少し違う色でも堅そうだった、しかしそれよりも驚いたのはそのいつのいる場所だったそこはなんと皇居の中だった

そして彼は皇居の中を探り俺たちがいるはずのところに来た、しかし俺たちは居なくて代わりに無かったはずの神器があった

「強化外装か俺はメタルカラーで防御が強いしな攻撃系に・・・いやでもブロッサムになにかプレゼントしたいしこれがいいかな」

あれがザ・デイスティニーという強化外装か後にディザスターになってしまうのが惜しいようなものだな呪いの鎧なんて言われて

神器を手に入れた謎の人物は皇居を後にした、そしてサフランブロッサムと名乗る女アバターと集合して強化外装を渡した、デイスティニーは強くブロッサムは加速世界で瞬く間に有名となった・・・しかしそれが失敗だった危険と感じみた加速者がサフランを拘束し全損させたのだそしてそれを憎んだクロムファルコンがデイスティニーを使い倒しまくって強化外装スターキヤスターと合体してディザスターが生まれた。

ようやく意識を取り戻した時にはけっこう深く時間が立っていた

一戦

目を覚ますときつきと違いちゃんとアーダーメイデンとトリリードテトラオキサイドがいた

俺は軽く頭を回し脳の思考動かしだ

「キーさん大丈夫ですか？随分と意識を失っていましたか？」

「ああ大丈夫、俺は災禍の鎧の過去を見ていたらしい」

俺は見たことをすべて二人に話した、クロムファルコンとサフランブロッサム的事そして皇居の中にあつた強化外装の事デイザスターの誕生した理由を

話終わつた後しばしの沈黙が続いた、誰もなにも言えなかつたのだろう悲しい過去だったのだから

「……、そんな過去があつたんですね、デイザスターの過去には悲しい話です」

「拙者もデイザスターについては分からぬのだがそういうお話には分かるでござる」

正直俺は今思うとデイザスターよりも加速研究会の方が許せなくなつていた、今まで出会つたブラックバイスとアルゴンアレイその二人は夢の中にもいた

「そう思うとデイザスターを早く成仏させてやりたいな、きつと苦しんだらうよデイザスターもだから早くハル達のところに行って浄化してあげよう」

「そうですね」
俺とメイさんは脱出することに決めたが肝心の脱出口がわからな

い
「脱出口の事ですよ、拙者が知っているので心配しなくても大丈夫ですよ」

「そうなのかよかつた、……でも脱出口があるならどうして今まで脱出しなかつたんだ？」

俺はトリリードに聞いた

「ここで調べることがあつたので残っていましたまあ当分ここに残る

んですけどね、まあとりあえず脱出口に向かいましょうか」

「着きましたここから出られます」

光が差し込んでいて球体型のポータルだった

「キルトさん出る前にお問い合わせごときいてもらってもいいですか？」

「なんだ？」

「拙者と一戦交えてほしいのです、キルトさんと出会ったときからあなたから放たれるオーラがすごいとわかっていたのでどうしても戦いたくなつて」

「なんだそんなことか、俺もトリリードから発せられるオーラで戦いたいと思つていたぜ」

そういつて剣を二本抜く、トリリードもジ・インフイニティを構える

そして互いに地を蹴つて一気に間合いを詰め寄る、キイイインという金属が同土がぶつかり合う音が響いた

重い!!一撃が予想以上に、このままだと押しきられる

つばぜり合いになって剣同士をぶつけたとたん全身に衝撃が渡つた、一旦身を引く

「やはりキルトさんは思つてた以上に強いかたですね、戦えて嬉しいです」

「お前の一撃も重すぎるぜけど負けない!!」

スキル『サウザントスクローム』を繰り出す、対する相手も固有アビリティを発動してきた

両スキルがぶつかり衝撃波が飛ぶそしてまた動こうとするとき

「ここまででいいです、あなたが強いのはよくわかっただから決着はお預けだ、さあそこを潜れば出口です」

俺も剣をしまい

「分かったまたいつかな!!」

と云い皇居を後にした。

旅行 in 埼玉

一日目

ーこれは、俺とシノンが加速世界で出会う少し前のお話ー

「えーそれでは明日からの四日間有効に使うように、四日後の持ち物はいつものと同じだ

ではまた四日後に」

先生の話がようやく終わった、俺は立ち上がりハル達の方に向かう、その途中ニューロリンカーに1つの着信が入る

《これから生徒会室に来るように

黒雪姫》

黒雪姫先輩からだった、俺はハル達のとこへ行きそして四人で生徒会室に向かった。

生徒会室前に着きハルがドアをノックする、すると中から

「入りましたえ」

と声が聞こえてきた

ドアを開け中に入る、中には黒雪姫先輩が一人座っていた

「学校終わりにすまないな皆、これから少し時間あるか？」

俺とハルそしてタクは大丈夫と言いチュは予定があるから五時までならと言った

「とりあえず何故私が皆を呼んだのかということこの四日間の中の二日間を利用してネガビユ五人で旅行に行こうと思ってるからだ!!!」

「旅行!？」

「ああそうだ、実はな昨日買い物していたらクジがあつて引いたら一組五人で旅行に行ける

チケットを当ててそれでちょうど五人で行けるかなと思つてな」

「どこに行くんですか?」

「埼玉県だ」

埼玉県、今でいう24年くらい前実際の俺の家がある県だ

「、、、で、皆予定は大丈夫か?」

「俺は行けます」「俺も」「僕も」「私も」
「そうかなら明日八時に梅郷中集合」

翌日

予定通り八時に集合して俺たちは新幹線に乗って埼玉県へ向かった

九時位には埼玉県に着き一日目の午前は自由行動にしてもらった、そして俺は埼玉県川越市に向かった

川越市はあまり変わっていなかったがやはり時代にともない少しずつ変化はしていた、しかし記憶を頼りに俺の家を探した

やはり俺の家は姿を残していなかった、数年前に工事をしたらしい、しかしそこには新しく

歴史館みたいなのが建っていた、そこに
「カズー」

と呼ぶ声があり振り向くとそこには四人の姿があった

「ここは？」

「何かの歴史館らしい」

俺は近くにいた人に聞いてみることにした

「ここって何の歴史館なんですか」

「ん？ここは20数年前に起きたソードアートオンライン、アルヴヘイムオンライン、ガンゲイルオンライン事件についての資料などがあ
るらしいよ」

俺は衝撃を受けた、俺の家は取り壊されてあの事件の歴史館になったのかという衝撃に、そしてこの歴史館を作ったとした人物は恐らく

「ここを作った人は誰なんですか？」

「えーと確かこここの家の青年で名前は桐ヶ谷和人というらしいよ」

やはり俺だったか

「なあここに入ってみないか？」

俺は未来の俺がどういう風に思いどんな風にここを作ったのかが
気になった、そして俺は中に入った。

歴史館の中に入ると黒と青白い剣が交差されているオブジェがあり《welcome in saoworld》と書かれていた

「この創設者も手の込んだ事をしているなあ、というよりデスゲームについてなどを提示しているところなのにこんな明るくて良いものなのか?」

「すいません」

黒雪姫先輩の物言いに俺はこう答えることしかできなかった

「なぜ君が謝るのだ?」

「この外観と景観を手掛けたのは未来の俺なんです、資料とかは菊岡さんがやったらしいんですけど・・・」

「そっそうなのか!?これはすまない」

「いいえ別に構いませんよ、それより中に入りましょう」

俺たちはsaoworldに向かって歩き始めた。

「えーと何々?第一層ボスイルファングザコボルトロード戦時一人の少年がビーターとなりβテストと初心者のいざこざを無くした、彼は黒のコートを羽織り後に黒の剣士と呼ばれるまでに至った・・・この容姿からしてこれカズだろー」

「うるせえな」

中に入ってみるとそこは主に英雄格の人物の事ばかりかかれていて、俺の事ばかりかかれていて先程からハル達に冷やかされっぱなしだ・・・ちきしよー過去に戻ったらALOにクリスハイト呼んで連続キルしてやる!!

「その他にも第35層でビーストテイマーの少女を救ってオレンジギルドを壊滅させ、第48層で鍛冶屋の少女と武器の素材を取りに行き一泊、ユニークスキル二刀流を手に入れる、最強ギルドの副団長と結

婚、一度ギルドを壊滅させるも蘇生アイテムを手に入れるために無謀な挑戦、愛する彼女を幽閉されたところから救出、昔の因縁をつけるために他のゲームで決戦とかすごいなあカズは」

確かに俺はあの世界で色々やってのけたさ、けれどもそれは皆のおかげさ

「とりあえず一通り見たし一旦外」

俺が声をかけたそのときバシィィィィと視界が暗転して加速世界へと飛ばされた

相手の名前は???となっていておれ以外は観戦席にいた

「いきなりだな、乱入者か」

「そうみたいです」

「来たぞ!!」

ブラックロータスの声と共に振り向くと二つのアバターが見えた

「2対1とは酷いじゃないか」

「・・・」

声をかけても無言でちかづいてくるだけだった、そしてようやく顔が見えると二人はロープをつけていて全然わからなかったが腰と背中につけている装備でフェンサーとソードマンだということはわかった、そして二人は剣を抜いてこっち目掛けて走り始めた俺も剣を掴んで走り出すしかし相手は一瞬止まったそしてフェンサー使いが今まで以上のスピードで突っ込んできたそれはなにかの光を帯びていたそれは俺は何度も見ているスキル《リニア》のだった

こいつらはソードスキルが使える?というのが衝撃的だった、それは恐らくこの歴史館だからだと思うが、それより俺はこいつら正体が気になった、そこでロープを上げる事に専念して集中力を削った、ソードスキルのモーションを入れ《ホリゾンタルスクエア》を繰り出すのが避けられるしかしこれはあらかじめ予想していた俺は2本目の剣で《ファントムレイド》を繰り出すスキルコネクトだ、そしてロープははがされて素顔が見える、、、、はずだったがそこにはロープの切れ端しか残っていなかった。

立ち込める暗雲

皇居の中から出ると共に有田家のホームサーバーに繋いであった俺のケーブルが抜かれて

俺は意識が現実世界へと引き戻された、

「桐ヶ谷くん無事だったか？」

黒雪姫の声と共にまだ戻りかけの意識が、完全に戻ってきた

「今、完全に意識が戻ってきました」

「そうか、では戻ってきたばかりですまんが皇居での状況を教えてくれないか？」

俺は皇居であったことを簡単に述べた、デイザスターの事・トリードの事も

「そうか・・・クロムデイザスターにはそんな過去が」

俺の話を聞くと先輩やハルも悲しげな顔をして黙り込んでしまった、そしてこの日は御開きとなった。

6. 19、水曜日

昨日の事を含めまだ少し浮かない顔の俺は自宅を出てとりあえず学校へと向かった、

考え事もしてないのにしてるような足取りで歩いていると、後ろから首根っこを捕まれた

首根っこを離されて掴んだ人を見るとそこに居たのは

「パドさん!？」

ブラッディキティー

赤のレギオンの副長にして三銃士血まみれの仔猫の異名を持つブラッドレパードことパドさんだった

「Hi」

「おはようございます、パドさん、、、、つていきなりそれはないですよ!!」

パドさんが差し出してきたのはXSBケーブルだった、そしてそれをいきなりニューロリンカーに差し込まれた

『いきなりここに来たのは申し訳ない、しかしどうして伝えたいことがあつてな』

『伝えたいことですか?』

『ああとてもヤバイから心して聞いてくれ、君たちの仲間のシルバークロウの即時粛清を』

P K 集団に依頼した奴等がいるらしい』

『ハル・・・のですか!?!、ですが7王達は今週一杯までは猶予くれると言つてたじゃないですが』

『ああ私も聞いた、しかし他のリンカー達の間で謎のキットの根源がシルバークロウではないのかという噂がたっているんだ』

『そんな!!ハルがそんなわけっ』

『分かっている私たちはクロウが根源だとは思っていない、彼のリアルを知っているのは私たちだけなんだよな?』

『はい』

『K ならすぐには狙われるはずはない、このことは黒の王たちにも伝えといてくれ』

そう言うとXSBケーブルを抜く、そしてパドさんはバイクに乗って帰る、と 생각이きや

「すまない、私のせいで遅れるかもしれないなそれは申し訳ないので送っていこう」

またもや首根つこを捕まれて座席に座らされ、俺は梅郷中まで送ってもらった

しかしこれがこの日いっぱい学校全体に『きれいなお姉さんに送られて登校してきた男』と

いう噂をたたせてしまう事になっていたとはまだ知りもしなかった。

驚愕

ブラッドレパード・・・パドさんに学校まで送ってもらい午前の授業4コマを終えてハルト

チユと昼食を食べようとしたそのときだった、ガラツという音ともに2ーCのドアが開いた、中に入ってきたのは全身黒を基調とした制服の

黒雪姫先輩だった

「2ーCの有田ハルユキ、倉嶋チユリ、桐ヶ谷和人、黛タクム以下四名を生徒会室への

即時出頭を要求する!!」

クラスにざわめきが起こり、俺達は一瞬にして注目を浴びた「タクは今日風邪でおやすみですが・・・」

とりあえず対応する

「そうか・・・なら三名はすぐに来い」

俺たちは言われるがままに黒雪姫先輩の後を追った。

生徒会室に入り俺たちは備え付けの椅子に座った

「まずは最初に桐ヶ谷くん大丈夫なのか？」

「いきなりなんですか？大丈夫って何がですか？」

「気づいていないのか？君は今日美人のお姉さんとタンDEMで学校まで来たってものすごく有名だぞ」

「美人のオネエサン!?ちっ違います、バイクで送ってもらったのはパドさんです」

確かに今朝から視線が妙だと思っていた

「ただ朝パドさんにハルがPK集団、スーパードヴァレムナントに狙われていると・・・」

「スーパードヴァレムナントだ?!」はい?」

俺の言葉は黒雪姫先輩の声に書き消された

「仮にだ、タクム君が仮病で新宿とかに言っていたらだ、それで視界

外で襲われることがあったらどうする？ハルユキ君がネガビユにいうというのは誰もが知っている、そこからチームメイト事潰すということにしていたらやばいぞ」

「そんな！僕のせいだ、そうだ今から早退して新宿とかにいけば」

ハルは立ち上がり生徒会室を出ようとするが、俺が止める

「そう焦るな、まずは連絡してみねーと分からないだろ」

「そうだな」

俺はニューロリンカーのコールリストを起動してタクを呼び出す

「……キリトか、どうかした？」

「風邪引いたって聞いてな、たいしたことのないのか？」

「ああ大したことないから、しっかりと薬を飲んで寝ているよ」

「分かった、なら今日は対戦を控えてゆっくりとな」

「ああ、それじゃおやすみ」

コールを切り、俺は一息つく

「しっかりと寝ているそうです」

「そうか、しかしレムナントが動いていることは明確だハルユキ君が一番だが、チユリ君も桐ヶ谷くん気を付けてな」

「わかりました」

しかし俺はタクと話してからの胸の奥にできた変な胸騒ぎが、収まらないことに不安を感じていた。

午後の2コマを終えて俺は飼育室へと向かった、すでに四埜宮謠は来ており

俺はとある事実を聞くことになった。

殺戮の目

放課後…… 飼育室にて俺と謡は先程のパドさんから伺った話と黒雪姫の見解について話し合った、

『それでは、PKギルドスーパーノヴァレムナントは有田さんを殺すのが目的なのですわ』

「ああ、そのため俺たちはハルを嚴重に監視していないといけない」

『そうですわね……… ん？フーねえから緊急のメールが届きました、ちよつと拝見させてもらいますわね』

謡はメールをタップして素早くメールを走らせた、そして目を見開くと小刻みに震え出した、

「お、おいどうしたんだよ？」

『《レムナント》が今日新宿の無制限中立フィールド一人のプレイヤーを襲撃したそうです』

『そしてそのプレイヤー一人に全滅させられたそうです』

俺は背筋に衝撃が走った、かのPK集団がたった一人のプレイヤーに殲滅させられたのだから、

『近くを通ったプレイヤーが見た限りでは、レムナントが脅してサドンドスを強行したが返り討ちにされて最終生滅を迎えたということですよ』

「いったいどこのどいつがそんなことを？王か王の側近か？」

『いえ違います、目撃したプレイヤーの話によるとそのプレイヤーは、水色の装甲を持つ重量級で、右手に貫通属性の強化外装を装備していたそうです、右手の杭に串刺しにしながら目撃者たちにこいつらはスーパーノヴァレムナントのメンバーだと告げてポータルから去ったそうです……… 彼はシアンパイルなのではないかと思われています。』

俺は衝撃とともに学校からマンションへ向かった。

《黛》の表札の目の前まで来る、俺は呼び出しチャイムをならす、

『どうぞ、僕の部屋に来てくれ』

タクの声が返ってきてドアが開く、そして俺は部屋にはいる、そこにはハルの姿あった、

「キリト遅かったじゃないか」

ハルの言葉で恐らくハルももう気づいていると分かった、ならば俺は身を引くことにした、これは彼らの問題なのだから、

「……ハル、話の続きだ、この僕にこびり着いたISSキットの目を断ち切ってくれ!!」

俺たちは直結するそして、ハルとタクは

「バーストリンク!!」

と叫び、世界は暗転した。

『会長、例のキットは順調に出回ってるようです、このままいけばすぐにも手配ができます』

『……………』

『わかりました、もうすこし時間を待つのですね』

加速研究会ブラックバイスは刻々と次の手を打つ準備を始め出した。